

---

## アメリカ・イギリスにおける施設の現状 －清水基金海外研修を終えて－

日本ライトハウス職業訓練部

津田 諭\*

---

### 1. はじめに

筆者は民間の社会福祉施設従事者を対象とした第16回清水基金海外研修助成事業によって、平成10年4月から2ヶ月半にわたってカナダ、アメリカ、イギリスを訪問する機会を得た。今回の研修では、当初、視覚障害者に対する職業訓練の諸施設を訪れたいと考えていたが、事前の下調べが足りず、カナダやアメリカではキャロルセンターを除いて十分な成果をあげることができなかつた。幸いにも最後に訪れたイギリスでは、王立盲人援護協会(Royal National Institute for the Blind、略称RNIB)の担当者とコンタクトをとることができ、彼のおかげで盲学校も含めたさまざまな施設を訪問することができた。結果として、職業訓練という狭い領域だけでなく、教育も含めた視覚障害リハビリテーション(以下リハと略す)全般にわたって見学し得たのは、私にとってありがたいことであった。本稿では研修内容を紹介し、日本における職業訓練のあり方を考える一助としたい。

本稿で取り上げる施設や学校は以下の通りである。

キャロルセンター (The Carroll Center for the Blind、米国マサチューセッツ州)

RNIBマノアハウス (RNIB Manor House、英国トーキィ市)

RNIB職業大学 (RNIB Vocational College、英国ラフバラ市)

ロイヤル・ナショナル大学 (Royal National College for the Blind、英国ヘアフォード市)

---

\* つださとる 日本ライトハウス職業訓練部 〒538-0042 大阪市鶴見区今津中2-4-37  
電話 06-6961-5521 FAX 06-6961-5525

## 2. キャロルセンター (The Carroll Center for the Blind)

キャロルセンターは、マサチューセッツ州ボストン市の隣、ニュートン市にある民間の視覚障害リハ施設である。1936年にトーマス・キャロル神父によって設立されたが、そのキャロル神父は視覚障害リハの確立に大きな役割を果たした人として知られている。

キャロルセンターには、マサチューセッツ州をはじめとして、諸州から訓練生が集まっており、一部の人は通所しているが、多くは入寮して訓練を受けている。緑豊かな敷地の中にある古い煉瓦作りの建物を施設として使っており、建物自体はきれいとは言えなかったが、のどかな環境のもとでリハ訓練が実施されている、という印象を受けた。

このセンターでは、成人の視覚障害者に対する生活訓練(Independent Living Program)とコンピュータ訓練が行われており、夏休みには中高生を対象とした夏期プログラム (Youth in Transition) も用意されていた。指導員の数は、生活訓練が15人ほど、コンピュータ訓練が4人で、訓練生の数も私が滞在した時は20人ほどしかおらず、こじんまりとした施設という印象を受けた。キャロルセンターについては、堺 (1995) の報告にも詳しい。

### (1) 生活訓練

生活訓練としては、歩行、日常生活 (Personal Management)、感覚 (Sensory Training)、家庭技術 (Home Mechanics)、ロービジョン、点字、メモ取り (Record Keeping)、ワープロ、フェンシングなどが行われていた。

このうち感覚訓練では、視覚以外の手がかりによって周囲の状況を判断しながら目的地点までたどりつく訓練を行っていた。見学した1コマの訓練では、訓練対象者に裏庭や駐車場など構内の状況を説明してメンタルマップを作り上げてもらい、目的地点までの白杖歩行において、太陽光の位置、音、路面の様子などを手がかりとして利用することを指導していた。また、家庭技術訓練では、ドライバーを使ってドアのノブを分解して再び組み立てることを通して、手指をうまく使って作業したり確認することを体験させていた。感覚訓練が独立した訓練として行われていることや、手先の訓練が重要視されているのがと

ても印象に残った。

ロービジョン訓練は、ロービジョンティーチャーと呼ばれる指導員が担当していた。通常、オプトメトリストが行う視機能の測定は行われず、レンズや単眼鏡、拡大読書器の紹介や使い方の訓練に重点が置かれているとのことだった。

コミュニケーション分野では、「メモ取り」と呼ばれる訓練において点字器や点字タイプライターを使って検索用カードを作ったり、視覚障害者用電子手帳「ブレイルンスピーカ（Braille'n Speak）」や「ブレイルライト（Braille Lite）」を使ってメモを効率的にとることを教えていた。また、アメリカでもICメモリを使った小型の音声電子手帳が便利で使いやすいと評判であり、このセンターでも「ボイスダイアリー（Voice Diary）」というのが紹介されていた。

### （2）評価訓練と生活訓練の費用負担について

キャロルセンターでの訓練を希望する人に対しては、まず2週間の評価訓練（Diagnostic Assessment）が行なわれ、生活訓練の必要性が評価される。もし、その希望者が仕事に就くことを希望している場合には、同じく2週間の作業評価訓練（Work Assessment）を実施する。評価訓練が終わると、リハカウンセラーが本人のニーズを再確認した上で、本人と本人を送り込んできた州のリハカウンセラーを交えてリハ計画を策定し、生活訓練あるいはコンピュータ訓練を開始する。

生活訓練にかかる費用は州によって制度が違うので一概に言えないが、マサチューセッツ州の場合、州がその80%を負担し、残りは各種基金などに申請してお金を獲得しなければならないそうである。本人は原則として負担する必要はない。リハ計画を策定するに際しては、例えばセンター側が16週間必要であると主張しても、州のカウンセラーは予算上8週間しか負担できないと主張するといったせめぎ合いが起こり、しばしばその間で妥協をはからねばならない、とのことであった。

### （3）コンピュータ訓練

コンピュータ訓練は職業訓練として位置づけられており、訓練期間は4週間を原則としている。訓練費用は原則としてその80%を連邦政府が負担し、残り

は州政府が負担するそうである。ただし、高齢者など就労に結びつかないと判断された場合は公費負担ではなく、各種基金などに申請して、なんとか訓練費用を捻出したことであった。

訓練に使うパソコンは最新のWindows 95搭載機であり、音声環境で使用する場合はHenter-Joyce社のJAWS for Windows、弱視者が画面を拡大して使用する場合はAi Squared社のZoomText for Windowsを使っていた。筆者は全盲の上級指導員が、技能レベルの違う4人の訓練生に対して、音声環境の操作訓練を行うのを見学することができた。

訓練としては、

- ①キーボードタイピング
- ②ワープロソフト Microsoft Word 97の操作法
- ③表計算ソフト Microsoft Excel 97の操作法
- ④Windows 95に付属するExplorerによるファイル操作
- ⑤Microsoft Internet Explorerを使ったインターネットアクセス
- ⑥メールソフト「Eudora」を使った、電子メールの送受信

等が行われていた。筆者は③と④について見学したが、マウスを使わず、音声を頼りにキー操作だけでWindows 95やアプリケーションソフトを使用する方法がうまく教えられているのに感心させられた。

JAWS for Windows上では、Word 97の操作が問題なく行えているとの印象を受けたが、日本でも最近リリースされた95リーダーの新バージョンとの機能上の比較はどうであろう。興味ある問題である。

表計算ソフトの定番となったExcelでは、日本のスクリーンリーダー上での操作環境と同じく、基本的な表操作しかできないようであった。もう一つのオフィス製品であるデータベースソフトMicrosoft AccessはJAWSとの相性が芳しくなく、やはり音声では使えないとのことだった。

インターネットアクセスにはInternet Explorerが使われ、JAWSによってホームページ中のテキスト部分が読み上げられていた。ただ、多くのホームページには余分な情報がたくさん含まれており、リンク先の選択のために、JAWSの中に特別な仕組みが用意されていた。JAWSの新しいバージョンでは、

ホームページの読み上げにさらに改良が加えられているそうである。

このセンターでは、初心者に対してWindows 95のキー操作とJAWS特有のキー操作の違いを意識させることなく教えていた。これは初心者にはオペレーティングシステムとしてのWindows 95をあまり意識させることなく操作させた方がよいという方針に基づくものであった。全体的に指導法がよく研究されているという印象を受けた。

#### (4) 職業準備プログラム (Job Market Preparation Program)

訓練を終えた後、就職を希望する訓練生に対しては、職業準備プログラムというのが用意されていた。

このプログラムでは、まず自己の能力を再認識し、仕事への興味、知識や技術の裏付け、得意不得意などから向いている仕事を割り出すJohn Holland Codeという判定法を使っていた。この方法は一般的なものであり、特に障害者向けに作られたものではない。たくさんの職種の一覧表から割り出されるのであるが、その中には明らかに視覚障害者には無理な仕事も含まれている。この方法が視覚障害者の職種選択にどれほど有効なのか疑問に思ったが、これを用いるのは職業に対する意識が日本とはかなり異なっているためであろう。

判定の後、社会的常識やエチケット、面接の受け方、履歴書の書き方など、具体的な求職技術の指導が行われるそうである。

#### (5) 職業斡旋サービス (Job Placement Service)

キャロルセンターでは、職業カウンセラーを1名雇って、独自のサービスとして職業斡旋を行っていた。対象はマサチューセッツ州在住の視覚障害者であり、このセンターで訓練を受けたかどうかは問わない。マサチューセッツ州では、州盲人協議会 (Massachusetts Commission for the Blind) という公的機関も職業斡旋を行っているが、キャロルセンターはそれとは別にサービスを提供しているそうである。

サービスの内容としては、まず求職者に会って希望職種や技能などを調査し、リストに登録する。求人開拓は、資金援助を受けている企業からの情報や州盲人協議会からの情報をもとに行う。アメリカでは一般に障害者の雇用率制度がなく、新聞での求人広告や州政府が行う雇用促進事業などを頼りに、広く求人

情報を集めなければならないとのことである。求人が寄せられると、求職者リストの中から該当者を選び出すことになる。そのリストを見せてもらったが、多くの視覚障害者が待機していることがわかった。

職業斡旋サービスの費用は、企業や財団からの資金援助でまかなわれ、求職者は無料でサービスを受けられる。訓練機関が独自に職業斡旋を行うというのは日本では考えられないことだが、アメリカでは珍しくないようである。

この職業斡旋サービスによって、年平均15人の視覚障害者が就職しているとのことであり、着実な成果をあげていることがわかった。しかし、その過程は決して容易なものではなく、担当者が企業に電話を掛けて「実は、就職を希望しているのは視覚障害者なのだが」と切り出した途端、いきなり電話を切られることも珍しくないとのことだった。こうした視覚障害への偏見や誤解が、就労が進まない原因だ、と担当者は語っていたが、アメリカでも程度の差こそあれ、こうした偏見が残っているようだ。

担当者に視覚障害者に向いた職種は何かを尋ねてみると、電話交換やテレマーケッティング（電話による商品の売り込み）のような職ではないか、という答が返ってきた。一般の事務職は、やはりペーパーワークの困難さもあって難しいというのが現実をふまえた担当者の意見であった。ただ、テレマーケッティングにしても、それほど報酬はよくはなく、視覚障害者自身がもっとよい職を希望することが多いとのことだった。秘書業務はどうかと尋ねると、紙に書かれた文書をみてタイプライターやワープロで打つことが多く、無理だという答が返ってきた。

### 3. RNIBマノアハウス (RNIB Manor House)

RNIBは、イギリスにおいて全国規模で視覚障害者へのサービスを提供している非営利組織であり、視覚障害リハ訓練、職業訓練、盲学校、統合教育への援助、出版、研究、レジャー、社会への啓蒙など、その活動は広範囲に及んでいる。RNIBの規模は他を圧倒しており、政府にも大きな影響力をもっている。

RNIBは視覚障害リハ施設を2ヶ所持っているが、その一つが英国南西部、デボン州トーキィ市にあるRNIBマノアハウスである。当地は英国海峡を望む

港町であり、マノアハウスはその風光明媚な高台に位置している。リゾート地を思わせる環境の中でリハ訓練を実施するのは、心理面でよい影響を与えるのではないかと思われた。

マノアハウスは、1941年に英国で最初の入所型視覚障害リハ施設として創立され、社会リハ（Social Rehabilitation：生活訓練よりも広い意味をもつ）とアセスメント（Assessment）、職業リハ（Vocational Rehabilitation）および職業訓練（Vocational Training）に取り組んできた。

筆者はこここの寮に滞在して研修を受けたが、小綺麗な寮であり、車椅子や盲導犬を連れた視覚障害者も受け入れられるように改造するなど設備も整っていた。

#### （1）初期評価

入所希望者に1週間をめどに行われる初期評価では、障害の把握、ロビジョン、心理的または情緒的問題の有無、歩行を含む生活能力、コミュニケーション、家族や地域の問題、職歴、就職への希望、パソコン使用、読み書き（Literacy）や算数（Numerics）などの評価が行われていた。また、職業リハを希望する人には、手先の器用さの評価も行われていた。これらの評価は各指導員によって行われ、それに基づいて作業心理士（Occupational Psychologist）と呼ばれる専門職が訓練対象者の「アクションプラン」と呼ばれる訓練計画を策定する。作業心理士という訳語は適当でないかもしれないが、アメリカのリハカウンセラーにあたる専門職で、その果たす役割は大きいようである。

手先の器用さの評価法は、職能評価として重要である。いくつかの評価法の実際を見ることができ、とても勉強になった。

#### （2）社会リハビリテーション

社会リハは、数週間の単位で行われ、歩行、日常生活、感覚、点字やパソコンなどの訓練の他に、訓練生の心理的問題や家族との関係を扱うカウンセリングや、訓練修了後の進路に関する相談業務も行われていた。イギリスでは、視覚障害のために離婚に至るケースも多いとのことで、訓練生の心理的ケアにも力が注がれていた。

### （3）職業リハビリテーション

職業リハは、職業訓練や高等教育への準備訓練、あるいは現在の職を維持するための短期訓練などを指している。職業リハは通常9週間をめどに行われるが、訓練生側のニーズに併せて短縮されることもある。事実、私が滞在している時も、経理関係の仕事をしている人が、職場から1週間の研修として派遣されコンピュータ訓練を受けにきていた。

コンピュータ訓練（イギリスでは情報工学Information Technologyと呼ばれる）ではWindows 95上で音声出力や画面拡大ソフトを使用していたが、このセンターではその導入訓練しか行われていなかった。イギリスでは、Windows 95の音声出力や画面拡大ソフトとしては、自国のDolphin System社のHAL 95（音声）やLunar（画面拡大）が多く使われていた。HAL 95はMS-DOS時代から使われている専用の音声出力装置や音声ボードをそのまま使用しており、最近のパソコンに標準搭載されているSound Blaster互換のサウンドボードにはまだ対応していなかった。

読み書きや算数も、訓練として継続されていた。読み書きでは、英語の表現や単語のスペルなど、基礎的な勉強をさせていた。また算数では、百分率の出し方、利息計算、金銭出納簿など、身近な課題をテーマに実際的な訓練が行われていた。

その他、プラスチック成型、園芸、皮革加工、木工など職業訓練につながるもの、およびオフィス事務、電話応対と受付、求職の仕方など基礎的な訓練が選択制で行われていた。

### （4）職業訓練

マノアハウスでは、NVQ（National Vocational Qualification）と呼ばれる職業資格のとれる訓練コースとして、プラスチック成型、木工、皮革加工の3コースがある。NVQはイギリス政府が定めた製造業における職業資格であり、上記3分野だけでなくさまざまな職種で詳細なカリキュラムが作成されている。健常者、障害者を問わず、これらのカリキュラムに従って職業訓練が実施されるのである。マノアハウスでは、プラスチック成型においてはNVQレベル1まで、木工ではNVQレベル1とレベル2が取得でき、皮革加工では

NVQレベル2が取得できる。レベル1は入門程度、レベル2は通常の職業訓練程度、レベル3は現場での作業実習を経て取得する資格である。レベル1の訓練を終えるためには、通常20週間から26週間かかり、レベル2の訓練は修了するのに46週間かかる、とのことである。

プラスチック成型は、粒状のプラスチックを熱で溶かして型に流し込むだけの作業であり、どちらかというと作業訓練的な意味合いが強かった。視覚障害者でもできる作業なので始めたようだが、あまり就職には結びついていないようだった。

木工では、電動のこぎりや旋盤などを使って、材料加工の基礎訓練が行われていた。安全を確保して作業させていたが、全盲者は寸法をとったり確認するのが難しそうであった。

皮革加工では、もう少しでNVQレベル2がとれる全盲の訓練生の作業をじっくり見学することができた。なめし革から、ミシンなどの機械を使って、ベルト、財布、バッグなどを製造していた。革にポンチなどで模様もいれており、手作り品としてはきれいな出来であった。就職の可能性を尋ねると、近頃は東南アジアからの安い製品に押されて皮革加工業自体が成り立たなくなっている、職業としては自営するしか道はない、とのことであった。

#### 4. RNIB職業大学 (RNIB Vocational College)

次に、イギリス中部レスター州ラフバラ市にあるRNIB職業大学を訪れた。この大学は1989年にラフバラ大学 (Loughborough College) のキャンパス内に設立され、その主な目的は視覚障害者が一般大学へ進むのを援助し、またラフバラ大学へ進んだ学生をサポートすることである。RNIB職業大学には70名ほどの学生がいるが、1年間在学した後、その3分の1がラフバラ大学に進み、残りの学生は就職したり、他の大学に進学することである。学生の年齢層は16才から19才までが3分の1を占め、残りは20才以上である。

職業大学のプログラムは、生活訓練やコンピュータ訓練、職能評価や職業準備訓練、あるいは寮生活のサポートなど、基礎プログラムや学生へのサポートが中心である。大学の規模は小さいが、スタッフは皆、とても忙しそうであっ

た。

プログラムの最後には、ラフバラ近郊または地元で2週間の職場実習が用意されており、学生にはよい体験になるとのことだった。しかし、大学側は受け入れてくれる職場を確保するのに、毎年苦労している、とのことだった。

学生は、政府が作った各種基金（たとえば高等教育基金諮問会Further Education Funding Councils）などから奨学金を得て、授業料を払っている。ただし20才以上の学生は政府からの奨学金が2年間しか受けられず、職業大学に1年、さらにラフバラ大学に1年在学した後、一旦退学して、奨学金を申請し直さなければならない、という矛盾もあるそうだ。

昨年度の修了生の内、68%の人が6ヶ月以内に就職したり、他の上級学校へ進んだそうである。

#### （1）初期評価と基礎プログラム

学生の進路を評価するために、政府機関の障害者雇用アドバイザー(Disability Employment Advisor)などと協力して、読み書きや点字、日常生活能力のチェックを最初に行っている。必要ならば数週間から1年かけて、読み書き、算数、キーボードタイピング、コンピュータ、歩行、日常生活、点字などの基礎プログラムを受けることができる。

#### （2）職業リハビリテーション（Employment Rehabilitation）

学生が自己の適性を知り、目標とする職業に就くことの意味を考えさせるためのカウンセリングを行い、将来に備えさせるプログラムである。また、求職技術や職を維持する技術、人間関係の構築やマナーなど社会人として必要な知識、技能も教えているとのことである。

#### （3）コンピュータ訓練

コンピュータ訓練は、45週間の訓練期間でNVQレベル1またはレベル2の取得することを目指して行われている。プログラムは、ワープロ、表計算、データベース、簿記、各種アプリケーションソフトの使用法や装置のメンテナンスなどから構成されていた。実際的な課題を与えて指導しており、NVQに則った実用的な訓練内容が印象に残った。

#### (4) 職業訓練

その他、いくつかの職業訓練が単独で、あるいは上級大学の教育コースにつなげるかたちで行われていた。

オフィス事務とは主に秘書業務を指すようで、NVQのレベル1またはレベル2がとれ、また王立芸術協会 (Royal Society of Art) が認定する「コンピュータ文書術と情報工学 (Computer Literacy and Information Technology)」のレベル1という資格がとれるそうである。

その他、キーボードタイピング、録音タイプ、電話交換 (Telephony) などの訓練も行われていた。特に電話交換では、いろいろな交換台がブースごとに備えられており、その設備はとても立派であった。筆者のセンターでも電話交換手の養成訓練をしていることもあり興味深く見せてもらったが、イギリスでは最近、求人件数が少なく、希望者が減っているとのことだった。

#### (5) ラフバラ大学の教育コースと学生に対するサポート

ラフバラ大学は7000人の学生を抱える一般大学であり、職業大学から進学した学生は、英語、ビジネス、旅行とレジャー (Tourism and Leisure)、ホテルと食料提供 (Hotel and Catering Studies)、情報工学 (Computing and Information Technology)、健康と福祉ケア (Health and Social Care) などのコースに進んでいる。情報工学などは、職業大学のコンピュータ訓練の延長として受講できるとのことである。科目によっては、職業大学に所属しながら受講できるものもある。

ラフバラ大学に移行した学生は、必要に応じて学習サポートサービス (Learning Support Service) から、対面朗読、点訳、拡大文字化、録音テープ化、レーズライターによる図作成などのサービスを受けることができる。また、ノートの取り方や図書館の利用の仕方等の指導も受けられる。学習サポートサービスのオフィスはラフバラ大学内にあるが、RNIBによって運営されている。

#### (6) ミッドランズ (Midlands) 地域への対外サービス (Outreach Service)

職業大学には、他の大学や学校に対する対外サービスの部署がおかれている。地域の学生に対する初期評価や学習サポートサービス、教員を対象とした講習

会などにスタッフが派遣されている。RNIBは統合教育を推進する立場にあり、全国を7地域に分けてこうした対外サービスの拠点をおいている。次に訪れたRNIBニューカレッジにも、別の地域を担当する対外サービスの拠点がおかれていた。

対外サービスのスタッフは専属で仕事をしており、職業大学の業務にはタッチしていない。

#### 5. ロイヤル・ナショナル大学 (Royal National College for the Blind)

ウェールズとの境に近いヘアフォード市に、視覚障害者のためのロイヤル・ナショナル大学がある。大学は125年の歴史をもち、現在170名もの視覚障害者が、寮で生活したり、通学しながら学んでいる。大学の授業料は年額20000ポンド（約450万円）ほどだが、多くの学生は政府から奨学金を得て支払っているという。

この大学では、学生に対して必要な学習サポートや就職に向けたカウンセリングをしながら、就職あるいは上級学校への進学を目指して教育を行っている。教育内容としては、基礎教科（点字、英語、算数、ワープロ等）、GCSE（General Certificate for Secondary Education）A-レベルがとれるアカデミックな教科（物理、心理、社会、生理、数学等）、GNVQ（General National Vocational Qualification）と呼ばれる資格が取得できるビジネス関係科目、NVQレベル1～3がとれる情報工学、その他、美術とデザイン、演劇、音楽、音楽工学（ミキサー、レコーディング技術）、スウェーデンマッサージ（Remedial Therapy）、スポーツ、ピアノ調律などの職業教科のコースがある。大学制度の違いもあるが、視覚障害者のためにこうした幅広いコースを用意する大学は日本ではなく、とても興味深かった。ただ、スウェーデンマッサージのように就職率が高いコースがある反面、なかなか就職に結び付かないコースもあるとのことだった。ピアノ調律は、日本でも一部の盲学校で職業教育として行われていたが、今では一校のみとなっている。

学内にはかなりの台数の最新型パソコンが導入され、本格的なローカルエリアネットワークで結ばれていた。学生やスタッフが学内のネットワークを通じ

て、電子メールのやりとりやインターネットアクセスをしているとのことであった。ただし全盲者は、まだ音声出力を備えたMS-DOSのクライアントマシンでアクセスしていた。

卒業生の30%はさらに他の大学に進学し、23%は3ヶ月以内に就職を遂げているそうだ。各コースについてもっと詳細な説明を受けたかったが、夏休み中で学生やスタッフもほとんどおらず、果たせなかった。

#### 6. アメリカやイギリスにおける視覚障害者の職業問題

アメリカやイギリスで視覚障害者が就いている職種について尋ねると、大体次のような答が返ってくる。「視覚障害のために職種が限られることはない。原則として、本人の能力さえあれば、どんな仕事にも就くことができる。車の運転など物理的にできないことは除いて、視覚障害だからできない仕事などないのだ」。この言葉に代表されるように、アメリカやイギリスでは視覚障害者の職種を限定して考えるという発想があまりないように思う。たとえば法律家になるためには、法律に対する知識やセンスが問題なのであって、法律書や文書を読むことができるできないは本質的なことではない。本が読みなければアシスタントを雇えばよいし、最近はパソコンを使って独立で読んだり書いたりできる範囲が広がってきたではないか、という訳である。職業は個人の能力の問題であって障害は関係ない、という考えに貫かれているのである。

アメリカやイギリスでは、原則として障害者も健常者と同じ基準で職業が選択できると考えられているし、それは基本的人権にかかわる大切なことでもある。障害をもつアメリカ人法 (Americans with Disabilities Act) でも、採用において障害のために不利な扱いをすることを禁じており、機会均等が保障されている。

しかし、このことは視覚障害者が容易にどんな職にでも就けることを意味しない。むしろ、雇用率制度がない(イギリスは今回のDisability Discrimination Actにより廃止される)だけ状況は厳しいかもしれない。たとえ面接は受けられたとしても、「能力が不足している」という理由で簡単に不採用になるのが現実である。アメリカやイギリスでは18才から65才までの視覚障害者のうち70

%が失業していると言われている。この数字には働きたくない人も含まれているので過大な見積もりであると言われているし、また視覚障害者の定義が日本と若干異なることを考慮しなければいけないが、それでも日本における視覚障害者の失業率の方が理療という職種があるおかげでより低いと思われる。事実、今回の研修においても、視覚障害者の職業問題にもっと積極的に取り組まなければならないという声を各地で耳にした。

## 7. 視覚障害者に対する職業訓練・教育のあり方

### (1) 一般職業教育と障害者職業教育・訓練の普遍性

こうした職業観のもとで、アメリカやイギリスでは実際にはどのような職業訓練に取り組んでいるのであろうか。すでに見てきたように、イギリスでは視覚障害リハ施設だけでなく、大学、盲学校などさまざまな機関で、コンピュータ、ビジネス関係、音楽など幅広い分野において職業教育が実施されており、その内容は国が定めた統一的な教育・訓練カリキュラム(National Curriculum)に基づいている。というよりも、国の職業教育・訓練カリキュラムの多くが、視覚障害者にも適用できるように作られていると言うべきかもしれない。そして、その課程を修了すると、より実務に近い分野ではNVQ、アカデミックな分野との中間領域ではGNVQ等の資格が取得でき、健常者、障害者を問わず同じ基準で到達度が判断されるのである。

日本では、高校の工業科、商業科、高専、専門学校、あるいは大学の実務系学科など一般の職業教育機関が視覚障害者を受け入れることは珍しく、またそれらの教育レベルや内容はまちまちであり、それらを統一的に評価する手段がないのが現実である。

これに対して、イギリスでは、セカンダリースクール、大学、職業訓練施設を通じて実務的な教育が重視されており、かつアカデミックな学科におけるGCSEも含めて、その教育・訓練内容が分野別に定められた統一的な基準で評価されている。学ぶ側も、大学や職業訓練施設という制度の枠を越えて、そこが提供する教育や訓練のレベルを明確に判断することができる。そして、各分野の国のカリキュラムは5年ごとに見直されており、たとえばコンピュータ訓

練を例にあげると、最新のオペレーティングシステムであるWindows 95や表計算ソフトExcelもすでに採り入れられていた。各分野のカリキュラムを作成、更新する作業には大変な労力を要すると思われるが、国の委嘱を受けた専門家が恒常に作業を継続しているのである。

考えてみると、高等教育の目的も社会で有用な人材を育てることにあるのだから、本来、大学教育は実務的な内容が主流であるべきなのかもしれない。イギリスでは実務に役立つ教育が重んじられており、RNIB職業大学などは視覚障害学生への学習サポートを行うことによって一般大学への門戸を広げ、視覚障害者の職業教育の幅を広げようという発想によって生まれた大学である。前節で述べた視覚障害者の職域の広さも、こうした職業教育・訓練のあり方がそれを支えているのである。

一般大学と提携して、視覚障害の学生が学ぶのをサポートするという態勢作りは、大学と訓練機関双方にメリットがある。大学側は学生の確保につながるし、サポート自体は訓練機関によってなされるので経費は大してかからない。一方、訓練機関は、幅広い訓練科目を独自で提供しなくてもよいのである。こうした協力体制が、先に述べた国の統一的な教育・訓練カリキュラムによって支えられているのは言うまでもない。

## （2）基礎プログラムの重要性

もちろん、イギリスの職業教育・訓練システムが、すべてうまく機能しているとは思われない。イギリスでも、近年、児童生徒の学力の低下が問題となっており、これは視覚障害者といえども例外ではない。基礎的な英語の読み書き能力が欠けている、人前で話すことができない、簡単な計算ができない、日常生活上の経験不足が目立つなど、学生や訓練生は職業教育以前にさまざまな問題を抱えている。そこで、どの訓練機関でも読み書きや算数といった科目に力をいれていた。短い訓練期間でこれらの訓練がどれほどの効果を生むのか不明であるが、それだけ当事者が危機感を感じているという証拠であろう。

歩行、日常生活、そしてコミュニケーションなどの生活訓練が基礎プログラムに含まれているのは言うまでもない。職業的自立のためには、本人の生活自立能力を高めておくのが前提条件だからである。この点で、キャロルセンター

やRNIBマノアハウス等がしっかりとした生活訓練は提供しているのが、とても印象に残った。RNIB職業大学などもこうした視覚障害リハ施設との連携を重視し、また大学自体でも学生に対して小規模ながらも生活訓練を行っている。職業訓練と生活訓練との連携の重要性を改めて確認できたことは、今回の研修の成果の一つであった。

### （3）コンピュータ訓練の重要性

さらに基礎プログラムの中で大切なものとしてコンピュータ訓練を挙げなければならない。欧米では、従来のMS-DOSにしても最近のWindows 95にしても、視覚障害者専用の環境（たとえば点字入力や視覚障害者用アプリケーションソフト）を構築しようという発想はなく、一般的には既存の機器やオペレーティングシステムをそのまま用い、そこに音声出力や点字出力機能を附加することによって健常者と同じアプリケーションを使うことを目指しているようである。

もちろん、この環境は視覚障害者にとって必ずしも使い勝手がよいものとは言えないが、健常者と共に共通の環境で共通のアプリケーションソフトが使え、かつコンピュータ技術の急速な進歩にも追随しやすい、というメリットがある。特に、職場で利用する場合には、共通の環境を構築することの重要性は論を待たない。従来、日本でもWindowsへの対応で視覚障害者は苦慮してきたが、JAWSを使ったキャロルセンターの訓練は筆者にとってとても参考になるものだった。今後、日本でもスクリーンリーダーの機能を向上させて、Wordをはじめとするオフィス製品、それにグループウェアやインターネットアクセスなども含めたWindows上の強力な仕事環境を視覚障害者も共有できるようにすることが大切である。

## 8. 結語に代えて

今回の研修では、特にイギリスにおける教育、視覚障害リハ、職業訓練の分野を越えた統一的な教育カリキュラムにとても感銘を受けた。もちろん、これが成果をあげて、視覚障害者の就労が進むかどうかは今後の進展を見なければなんとも言えない。しかし、視覚障害者の社会参加を促進するためには、日本

においても教育分野を含めた総合的な観点から、職業教育・訓練体制の見直しが必要なのではないかと感じた。盲教育を含めた教育全般に対して筆者の浅学を省みずには言わせていただければ、イギリスの実務的な教育・訓練体制とその中に位置づけられた視覚障害者に対する職業教育・訓練は、とても示唆に富んでいるように思える。

今回の海外研修は、日本の状況しか知らなかった筆者に新しい視点を与え、考える幅を広げてくれたと思う。研修のチャンスを与えてくれた清水基金と職場の同僚に感謝したい。

#### 参考文献

堺 真理 1995 アメリカ合衆国における視覚障害リハビリテーション. 視覚障害リハビリテーション, 第41号, 5-29. 日本ライトハウス.

## 住みよい環境づくりを実現するために…



磁気誘導と音声案内による一人歩きに

### ■ 視覚障害者誘導システム HANMYO (みちしるべ)

目標物の確認と道先案内は

### ■ 音声標識ガイドシステム 音声・触知・点字によるトータルインフォメーション ■ サインシステム



池野通建株式会社

総社開発本部

〒115-0051 東京都北区浮間2-13-10 浮間事業所1F ☎03(5994)3101  
本社 〒114-8544 東京都北区東十条2-13-9 ☎03(3913)6111(大代表)